

## 柳田國男の『火の昔』

先人の苦労や工夫を知り、  
火の今を考える(上)

な  
ら

民俗通信

武智功

□258□

食物の調理も暖をとる火、  
闇を照らす灯火や神仏に捧  
(ささげる灯火(ともしび))  
ない火は太古より人の暮らしに欠かせない存在であり、人々は火を使いに使つ努力を積み重ねてきた。

民俗学者・柳田國男の『火の昔』(昭和19年1月4日年初版)は、灯火管制があつた戦時下にあって、この火の文化に関わる先人の苦労、工夫を考え著作として知られる。

柳田の言葉に「何が新しく生まれた美しさで、何が失われた大切な何か。それをいつも考えること」がある。『火の昔』から灯火の歴史の一端に触れ、また灯火に関する「失われた大切なものは」は何かという「火の今」を考えてみたい。

▼灯火の変遷

柳田は『火の昔』の冒頭で、夜の闇は「静かに休むのには適しているが、外で働き、道を歩くという人たちは、かなり大きな妨げであり、『そのやみを明るくするために、皆がたいへんな苦労をした』と記している。

灯火の歴史を概観すると、その原初は屋外で枯れ木などを焚(た)く火であ



## 一番大切で美しい存在

月、7月15日を中心としたお盆などからも分かる。新暦になった今も、神社の大好きな祭りは15日に行われることが多い。満月の日は日を特定しやすく、また明るい。それとともに、月の引力の影響の大きい特別な日であることも、昔の人々は体験的に知つていていたに違いがない。

月以外に分かりやすい月の形は半月(旧暦7月頃が「上弦の月」・23日頃が「下弦の月」)で、柳田は「月の二十三日、夜中すぎにお月さまの出られるのをまつる習わし」(二十三夜待ち)があるとも記している。

柳田は「近ごろでは、昭和19年(1944年)、盆燈籠はただの家の軒先に吊るすものとな

つたと思われる。そして屋内では炉を作り、屋外では松の木などを束ねた松明(だいまつ)を使うようになる。

その後、獸油や魚油、また植物の実なら油の利用が始まり、油を点(とも)すための灯火器なども工夫された。また貴重品であったが、蠟燭(ろうそく)による灯火もあった。

この松明が「ちょうど松の普及するまでの、屋外のあかりのたつた一つの方法であり、「今でもまだおりおりは見ることができるまいまつ行列は、虫送り」

### ▼盆の火

柳田が、昔の人々は人が灯火なしでは夜道を歩けないので「目に見えない神さまでも靈でも、すべてが同様だろう」という考え方があつたとみえまして、ひでりの神や虫の神を送るのにも火をいたたように、盆に遠くから家の御先祖が帰つてこられるにも、まいまつをともして迎えなければなら

### 「古い形では柱松といつて、非常に長い柱のような

ぬ」という心持ちは普通であり、「家の外でたく火の中のいちばんいたせつなまた美しいものとされていました」と指摘するように、神仏の行事に関わる灯火は大切な存在であった。

### 信仰に関わる灯火の中

で、盆の火を例に、その変遷を見ていく。

現在も麻幹(おがら)を

門口などで焚いて迎え火や

送り火を行い、盆提灯(ちよぢん)を吊(つ)るす

所も多いが、かつては盆に高燈籠(たかとうらわ)といふものを掲げて

いたようだ。

この項続く、次回は12

明治時代には、石油ランプやガス燈なども使われ、その後は現在の電気の灯火となつた。変遷には、灯火として安全かつ効果的に使える工夫、また用の美を求める工夫があった。

この中で古くからあつた松明について、柳田は「夕イマツ」という言葉は、今ではよくわからぬ今まで人が使って「いるが、もとは手に持つて火、すなわち手火であつた」、「今でいえばだからこそくやマッチの軸木など、皆一つの手火」など、松明の語源を手火の松としている。

この松明が「ちょうど松の普及するまでの、屋外のあかりのたつた一つの方法であり、「今でもまだおりおりは見ことができるまいまつ行列は、虫送り」

また柳田が「古いいろいの祭りの儀式は、この満月の晩を待つて」行つたと

いうように、灯火の発達していく時代には月の存在が大きかった。

明治5年12月2日(1872年12月31日)に、太陰太陽暦から現行暦へ移行された。それまでは満月の夜に大切な祭りが行われたことは、旧暦1月15日の小正

月が夜中に沈んだ後闇を「曉闇」、遅い月の出までの闇を「宵闇」とい、宵闇は「やがて月が

出る」という意味をもつてお

る。一方、曉闇は

「船の帆綱をくるとの同

じしかけて、そのあかりを

できるだけ高いさおの先へ

つりあげて、盆燈籠とす

るものだ。

この高燈籠以前につい

て、柳田は「高いさおの先

に火をあげて、空を来る神

靈を案内する必要は、まだ

ろうそくがなく、燈籠がで

きない以前から」あつたと

し、昔の人たちの工夫を紹介する。

「古い形では柱松といつて、非常に長い柱のような

ぬ」という心持ちは普通

であり、「家の外でたく火の中のいちばんいたせつなまた美しいものとされていました」と指摘するように、神仏の行事に関わる灯火は大切な存在であった。

信仰に関わる灯火の中

で、盆の火を例に、その変遷を見ていく。

現在も麻幹(おがら)を

門口などで焚いて迎え火や

送り火を行い、盆提灯(ちよぢん)を吊(つ)るす

所も多いが、かつては盆に

高燈籠(たかとうらわ)といふものを掲げて

いたようだ。

この項続く、次回は12

つていますが、百年前までは、京都でも江戸でも、高燈籠がたいへんはやつて、家家」とい長いさおを立てた」と記している。高燈籠は「船の帆綱をくるとの同じで、そのあかりができるだけ高いさおの先へつりあげて、盆燈籠とするものだ。

ついで、盆燈籠とするものだ。

この高燈籠以前について、柳田は「高いさおの先へ

に火をあげて、空を来る神靈を案内する必要は、まだ

ろうそくがなく、燈籠がで

きない以前から」あつたと

し、昔の人たちの工夫を紹介する。

「古い形では柱松といつて、非常に長い柱のような

ぬ」という心持ちは普通

であり、「家の外でたく火の中のいちばんいたせつなまた美しいものとされていました」と指摘するように、神仏の行事に関わる灯火は大切な存在であった。

信仰に関わる灯火の中で、盆の火を例に、その変遷を見ていく。

現在も麻幹(おがら)を

門口などで焚いて迎え火や

送り火を行い、盆提灯(ちよぢん)を吊(つ)るす

所も多いが、かつては盆に

高燈籠(たかとうらわ)といふものを掲げて

いたようだ。

この項続く、次回は12

月16日付予定